

第28回村野藤吾賞選評

相同と差異の絶妙なバランス

千葉学

犬島は、本州岡山側から船で10分足らずの瀬戸内海に浮かぶ小さな島である。もともとは犬島石の採掘場として産業が始まったようだが、その後も銅の精錬、二硫化炭素の製造、オリーブの栽培など、さまざまな産業が勃興しては衰退を繰り返した歴史を持ち、今現在の人口は80人にも満たない。言うなれば、日本の各地に見られる限界集落のひとつである。当然住人の多くは高齢者である。この小さな島の集落の風景の中にひっそりと、しかしながら確かな存在感を持って妹島さんの作品群は織り込まれている。

風景の魅力を顕在化させるもの

このプロジェクトは、ベネッセコーポレーションがこれまで直島、豊島で展開してきたアートによる地域再生の延長上に位置づけられるもので、放っておけば朽ち果てていく運命にある木造民家や空地に介入するかのよう、散逸的に配置されている。全部で6棟ある建物は、アルミによる休憩所を除きすべてがギャラリーである。そのギャラリーのうちの3棟は、もともとこの地に建っていた民家を再生したもので、残りの2棟はアクリルによる展示空間となっている。

木造のギャラリーは、民家を解体した上で使える材料を選別し、足りない部材は補いながら、適宜鉄骨による構造補強を行い再建している。瓦も、使えるものは再利用し、足りないものは規格に合うものを全国から探してきたという。こうした島に眠る「資源」の発掘と、慎重で丁寧な素材の扱いによって生まれた空間は、もともと民家が持っていた小屋組や空間のスケールを踏襲しながらも、僅かに異なる繊細な軒先や開口のディテールなどによって実に瑞々しく建ち上がっている。また軸組から外に持ち出された鉄骨の耐震壁や、妻側に設けられた屋外ギャラリーが耐震要素になるという、さりげなくも合理的な補強が柱を自由にする。さらに大きく開閉できる建具が付加されることで、室内に庭が雪崩れ込んでくるような明るさと軽やかさを醸し出している。この、周辺に建ち並ぶ民家との相

同と差異の絶妙なバランスは、新しいギャラリーと既存集落との間に親和性を築きつつも、そこに潜在する風景の魅力を鮮やかに顕在化させるという、懐かしさと新しさが共存したような、魅力的な風景を生み出すことに成功している。

人の「手入れ」の風景に溶け込むアクリル

一方のアクリルのギャラリーは、湾曲したアクリルそのものが構造となることで、屈折/反射する光と展示作品だけが庭に浮かび上がる。この集落には、石積みや菜園、家具など、さまざまな人の「手入れ」の風景が民家と共にあるが、このアクリルは、想像を裏切ってこうした風景に溶け込み、まるでこの「手入れ」の風景が結晶化したようにさえ見えるものとなっている。そしてこのアクリルという、いわば構造が不可視になる風景によって逆説的に、集落全体の秩序が実は建築の様式以上に構法という生産の風景が支配的なのだということにも気づかせてくれる。このギャラリー群を巡る行為は、そのままこの島に潜在する魅力への豊かな気づきをもたらしてくれるのだ。

建築にできること

かつては部外者が気軽に歩くことすら困難であった町にこのような計画が実現したことは、妹島さんが継続的に島に足を運び、島民とのコミュニケーションを図ってきたからに他ならない。もちろんこのような限界集落に対する介入として、果たしてアートを通じた観光だけが唯一の救いなのか、また観光による生活基盤の変化は脆弱ではないのか、などの課題はある。しかしながら、島全体の風景が見事に更新された様は、それだけで力がある。実際すでにこの島に移住してきた人も出て来ているとも聞く。そして今後は「家プロジェクト」は宿泊施設や学校へと展開していこうという計画も進んでいるらしい。多くの課題を孕むこうした今日的な課題に、建築にできることを実に愛らしく具現化したその姿勢は、建築界に大いなる勇気を与えてくれるものである。